

# 芸術は心に必須の栄養素



はしもとやすし  
橋本康志  
とす  
鳥栖市長(佐賀県)

## 音楽への王国

私の音楽との出会いは、78回転のSP盤(古いレコード)で聴いた往年の巨匠の音楽です。指揮者のトスカニーニ、バイオリンのハイフェッツ、ピアノのバックハウス、声楽のシャリアピン(シャリアピンスターキでも有名)など、よく聴いたものです。小学生の時には、親に頼んで指揮台を作ってもらい、レコードをかけては箸を持って指揮台に上がり、演奏家気分音楽を楽しみました。

生演奏を初めて聴いたのは、小学校2年生の時。夏に父を病気で亡くし落ち込んでいた私を見かねて、いとこがゲオルク・ショルティ指揮のウィーン・フィル演奏会に連れて行ってくれました。ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」、第6番「田園」の組み合わせです。初めて聴く生演奏に、くずんとし、それ以来、音楽は私の心の支えであり続けています。その時の経験から、できるだけ小さい時に、さまざまな分野で最高のものに触れる機会をつくるのがその後の人生を心豊かなものにするという、確信めいたものを持ちました。

その後、33回転のLP盤が出て音質も向上し、高校生時には親に無理をいってオーディオを買いました。印象に残るのは、ピアノのグレン・グールド、リヒテル、ポリ

二など、おの自分の音色を持った演奏家で、ほとんど生演奏を行わなかったグールド以外は演奏会にも行くことができませんでした。かくいう私は高校3年までピアノを習っていましたが、音楽で飯を食えるほどの才能がないことを悟り、早々に挫折しています。

大学受験に失敗した私は予備校に通い始めましたが、予備校時代と大学に通った計5年間で最も演奏会や美術館・博物館に通う期間となりました。何冊分の参考書代がそれらに消えていったか分かりません。ごめんなさい。

予備校時代から十数年を東京で過ごすことになりましたが、音楽、演劇、美術館、博物館など、文化施設が大都市に偏在することは大きな課題です。特に演劇は、大都市でないとなかなか鑑賞する機会はなく、寺山修司、つかこうへい、蜷川幸雄など、話題の新作を見ることができませんでした。

## フッペル・ピアノコンクール

鳥栖市には、フッペル(HUPFER)というピアノがあります。昭和6年に当時の子どもたちに優れた情操教育を行いたいと、婦人会や有志の皆さまで資金集めをして購入したグランドピアノです。当時2階建て



フッペルのピアノ

の家3軒分の値段がしたと言われています。第2次世界大戦の戦況が厳しくなった際、音楽学校出身の特攻隊員が、このピアノでベートーヴェンの月光ソナタを弾いて飛び立ったという逸話があり、平成5年には「月光の夏」という映画も作られました。また、平成7年から「音楽による世界平和創造」というコンセプトでピアノコンクールを開催しています。このコンクールの特長は、1次予選、2次予選、本選が3日間連続で行われ、受験者の皆さんは1回の演奏会が開けるほどの準備が必要なことです。従ってレベルが非常に高く、ここから



たくさんの観客が詰めかけたメイン会場



ラ・フォル・ジュルネ鳥栖

たいと強く思い、平成22年2月

会をつくりたいと考えていた私

「シューベルト」とのことです。

ちなみに2022年のテーマは

1995年から始まり、現在は

祭を企画したルネ・マルタン氏

のがラ・フォル・ジュルネ音楽

から転じた技術者が集まるラ・マシーンと

という工房です。そして音楽分野を担当した

就任されたのがジャン・マルク・エロー

市長でした（後にオランダ政権時の第20代

首相）。

エロー市長の取り組みは、ロワイヤル・

ド・リユクスという演劇集団の育成から始

まり、その舞台装置を担当するのは、造船

から転じた技術者が集まるラ・マシーンと



ルネ・マルタン氏（右から2番目）と筆者（左端）

る地域をつくりましょう。

芸術は心に欠かせない栄養、個性あふ

園・幼稚園、小学校での演奏家によるワー

クショップは現在も毎年継続しています。

楽しみは、演奏家や聴衆が同じ空間で2日

間を過ごす間に親しくなり、新たな世界が

広がることです。また、この時始めた保育

にルネ・マルタン氏を口説くためにナント市

を訪ねました（もちろん私費で）。紆余曲折

## ラ・フォル・ジュルネ「熱狂の日」音楽祭

相互交流事業も続いています。

年以來、平和教育と異文化理解を進める相

フツペルが作られたのは旧東ドイツの

の優勝者は、優勝賞金に加えて、翌年オー

ことを期待しています。また、コンクール

音楽界を代表するような演奏家が出てくる

私がこの音楽祭の存在を知ったのは、九

州経済同友会の道州制を検討する委員会の

勉強で、EU諸国を回っ

た時に訪ねたフランスの

ナント市です。今フラン

スで最も元気なまちといわれるナント市で

すが、ナント市の文化顧問・ジャン・ルイ・

ボナンさんから、文化によるまちづくりの

興味深い取り組みをたくさんお聞かせいた

だきました。

ナント市は、ロワール川が大西洋に注ぐ

河口近くにあり、その昔造船業で栄えたま

家300〜400人、お客さま6万人強に

集まっていただき（3年間で延べ19・5万

人）盛大に開催できました。この音楽祭の

集まっていただき（3年間で延べ19・5万